

計画出荷を目指したスプレーギク等の開花調節技術

副主査研究員・松本 比呂起

[要約]

夏季作スプレーギクにおいて、遮光資材を用いた消灯後の日長管理において、開花遅延を起こさずに切り花品質の向上が可能な方法を開発した。

ストックにおいて、①安定して年内に開花させられる電照処理法、②4～5 月出荷時の切り花品質を向上させるトンネル高温処理法を開発した。これらを組み合わせることで、同一圃場でのストック年 2 回作付け体系が可能であると考えられる。

[背景・ねらい]

①夏季作スプレーギクでは、遮光資材を利用した日長管理(シェード処理)により開花調節が行われている。しかし、シェード処理法は個々の生産者の経験によっており、開花時期の遅れや品質のばらつきが発生している。そこで、これらの問題を解決する消灯後の日長管理技術を検討した。

②ストックは花芽分化には一定以下の温度が必要なため、年内出荷作型では秋季の気象条件により開花時期が大きく遅れてしまうほか、4～5 月出荷作型では低温により切り花長が短くなり品質が低下してしまう。そこで、開花時期の安定化および切り花品質の向上を図る開花調節技術を検討した。

[成果の内容・特徴]

①スプレーギク

- ・夏季作において、消灯後 20 日間を 13 時間日長、その後開花まで 12.5 時間日長で管理することで、多くの品種で開花遅延を起こさず(図 1)、切り花品質を向上させることができた。



図 1 消灯後の日長管理が開花に及ぼす影響 (左: 慣行管理、右: 13 時間 20 日間管理)

②ストック

- ・8 月上旬に播種し、本葉 15 葉展開時から発蕾まで白熱電球を用いて約 0.4 W/m²の放射照度で深夜 3 時間電照を行うことで安定して年内に出荷できた。
- ・1 月上旬に播種し、定植後 6 週間のトンネル高温処理を行うことで、4～5 月に出荷でき、切り花品質も向上した(図 2)。
- ・以上の電照処理+トンネル高温処理を組み合わせることで、同一圃場での年 2 回作付け体系が可能であると考えられた。



図 2 高温処理期間が切り花品質に及ぼす影響 (左から順に無処理、トンネル処理 2 週間、4 週間、6 週間)